

# 「こども理解」を目的としたサウンドスケープに関する研究 ～「音さがしの本」を手がかりにして～

Research on Soundscape Aimed at "Understanding Children"  
—Using *Sound Search Book* as a Teaching Material—

久米 隼\* 小澤 俊太郎\*\*

**要旨** 本研究は、保育者・教育者はもとより、保護者も含めて、こどもに携わるすべての者にとって必要不可欠な「こども理解」を深めるにあたって、こどもの環境に着目し、特にこどもを取り巻く音の環境（サウンドスケープ）へ意識を向けることが、こどもへの理解をより深めることにつながるのかを考察することを目的にした。意識を向けるための教育プログラム（サウンド・エデュケーション）として、こども向けの課題集「音さがしの本ーリトル・サウンド・エデュケーション」を用いた実証研究を行った結果、こどもを取り巻く「音」の環境に目を向け、耳を傾けることが、ひいてはこども理解の一助となる可能性が示唆された。

【キーワード：こども理解 サウンドスケープ 音の環境 音さがしの本】

## 1. はじめに

### 1. 本研究の目的と研究背景

本研究は、保育者・教育者はもとより、保護者も含めて、こどもに携わるすべての者にとって必要不可欠な「こども理解」を深めるにあたって、こどもの環境に着目し、特にこどもを取り巻く音の環境（サウンドスケープ）へ意識を向けることが、こどもへの理解をより深めることにつながるのかを考察することを目的としている。

保育者・教育者ないしは保護者も含めた「こどもに携わるすべての者」にとって、「根底になくはない」（塚本 2018：3）のが「こども理解」である。

そこで、本研究ではこどもへの理解を深めるにあたり、その手がかりのひとつとして、こどもを取り巻く「環境」に着目し、「人、もの、自然、場所、時間、空間など、子どもを取り巻くすべて」であり、「保育者や友だちとのかかわりを含む状況」すべてとして捉えることとした（塚本 2018：17）。

こどもに携わる者にとって、塚本が示すようなこどもを取り巻く環境を捉えることは、「こども理解」において重要な手がかりとなる可能性もあるが、こどもを取り巻く環境は広域にわた

ることから、本研究においては環境のうち、特に「音」の環境、すなわち「サウンドスケープ（Soundscape）」に着目することにした。

サウンドスケープとは、カナダの音楽家であるレーモンド・マリー・シェーファー（Raymond Murray Schafer, 以下「R.Murray Schafer」）が提唱した、音の環境に関する概念で、「個人、あるいは特定の社会がどのように知覚し、理解しているかに強調点の置かれた音の環境。したがって、サウンドスケープはその個人がそうした環境とどのような関係を取り結んでいるかによって規定される」（Barry Truax 1978：126）ものである。

つまり、日常的な周りの音環境のすべてを指す言葉であり、文化や、個人が暮らす社会によって、常に変化していることを示している。

このサウンドスケープを理解するための教育的な手法として、R.Murray Schafer は「サウンド・エデュケーション」という、周辺環境にある音を正しくきく<sup>1)</sup>ための教育プログラムを開発し、社会全体で音環境について考える必要性を訴えた。

サウンド・エデュケーションは、社会で生活する「すべての人」を対象とした教育プログラムであるが、とりわけ「こども」を対象とした課題集として、R.Murray Schafer は今田とともに「音さ

\* 埼玉純真短期大学 こども学科 助教

\*\* 埼玉純真短期大学 こども学科 専任講師

がしの本ーリトル・サウンド・エデュケーション（以下、「音さがしの本」）」を日本のこどもに向けてまとめている。同書は、こどもたちが自分たちでもできるような内容で構成され、こどもが自らサウンドスケープを学べるように、随所に工夫がされている。

そこで、本研究では、こどもを取り巻く環境のなかでも特に「音」に着目し、「音さがしの本」を用いた教育プログラムに取り組むことが、サウンドスケープへの意識や、こども理解を深めるにあたってどのような意味をもたらすのかを明らかにする。

## 2. 分析の視点

本研究は、こども理解を深めるにあたり、サウンドスケープの意識がどのような意味をもたらすのかを明らかにするために、次の3点について、国内外の先行研究による文献調査をもとに分析をした。

- ①こどもが「音」をどのように認識をしているのかについて
- ②こどもを取り巻く音の環境に対する我が国の対応等について
- ③音を「きくこと」を通した、こども理解とサウンドスケープについて

また、サウンドスケープを理解するための教育プログラムであるサウンド・エデュケーションのなかでも、こども向けの課題集である「音さがしの本」に示された課題が、こども理解につながるのかについて、実際に課題を実施し、取り組みから得られたデータを用いて実証的な分析をする。

## 3. 研究の方法

本研究では、文献調査および実証研究をもとに研究を行った。

文献調査では、R.Murray Schafer が提唱した「サウンドスケープ」ならびに、その教育プログラムとして開発した「サウンド・エデュケーション」さらには、こども向けの「リトル・サウンド・エデュケーション」が、こども理解につながる可能性について、先行研究をもとに研究を行った。

実証研究では、文献調査で得られた知見をもとに、R.Murray Schafer がまとめた「サウンド・エ

デュケーション」のなかでも、こども向けに刊行された課題集である「音さがしの本」を題材とした。

同書は、サウンドスケープを理解するために100の課題を1冊にまとめた課題集であり、こども向けの「教育プログラム」を提示している（神林 2017: 5）。

そのなかから、3つの課題を取り扱い、実際に課題を教育プログラムとして展開したうえで、「こども理解にどのようにつながったのか」について、実際の取り組みから得られた実証データをもとにして研究を行った。

なお、実証研究は、S短期大学において令和4（2022）年度前期開講科目である「こども学」を履修する学生の協力を得て行った。

研究に協力した学生は履修学生（71名）のうち、本研究への参加に同意した学生（68名）である（97.8%）。

同意を得るにあたっては、研究協力において個人名が第三者に特定されることがないこと、参加は自由意志であり拒否における不利益はないこと、本研究の目的と内容を参加者へ口頭ならびに書面にて説明を行い、書面にて同意を得た。

## 4. 用語の定義

本研究においては、次のように用語を定義する。

### 1) こども

こどもの表記をめぐるのは、「子供」や「子ども」といったさまざまな議論があるが、本研究においては、本研究論文の投稿先である「埼玉純真短期大学研究論文集」を発行する埼玉純真短期大学が設置する「こども学科」の学科名の表記にあわせて「こども」の表記に統一をすることとした。なお、「こども」が示す対象年齢は、未就学児とした。

### 2) サウンドスケープ

カナダの音楽家である R.Murray Schafer が提唱した用語であり、サウンド（音）とランドスケープ（風景）を合わせた造語である。

R.Murray Schafer は、この用語を「個人、あるいは特定の社会がどのように知覚し、理解しているかに強調点の置かれた音の環境。したがって、サウンドスケープはその個人がそうした環境とど

のような関係を取り結んでいるかによって規定される」と定義をしている (Barry Truax 1978 : 126)。

その他にも「私は音の環境をサウンドスケープと呼ぶ。私たちがどこにしようとも、その音の場のすべて、それがサウンドスケープである」 (R.Murray Schafer 1992 : 2) と述べている。

このように、「サウンドスケープ」という概念は、固定化されておらず、流動的な意味をあわせても用語であることが分かる。

そこで、本研究では、サウンドスケープを「我々の周りに存在する全ての音環境を捉える考え方」として定義し、用いることとする。

### 3) こども理解

こども理解について、幼稚園における幼児教育を所管する文部科学省は「幼児を理解することが保育の出発点」(文部科学省 2019 : 3) であるとし、「幼児を理解するとは一人一人の幼児と直接に触れ合いながら、幼児の言動や表情から、思いや考えなどを理解しかつ受け止め、その幼児のよさや可能性を理解しようする」(文部科学省 2019 : 9) ことであると定義している。

この文部科学省の定義は、幼稚園における幼児教育という、こどもを取り巻く「一つの場面」を想定したものであるが、サウンドスケープの教育プログラムの概念であるサウンド・エデュケーションについて検討をするにあたり、同じ「教育(エデュケーション)」という視点によるこども理解の定義として、参考にすべき定義である。

とはいえ、こどもの生活の場所や場面、環境は幼稚園に限った話ではなく、こどもの生活にあわせて変化が生じるものであることから、この定義だけでは十分とはいえない。

権藤・柴・戸江がこども理解について、「子どもに寄り添って子どもを丸ごと受け止め、受け容れること」と表すように、こども一人一人の内面に着目する概念のようにも捉えることができる(権藤・柴・戸江 2017 : 55)。

ここで注意しなければならないのは、こどもの「気持ちや感情は変化していく」と同時に、多くの気をとられてしまうと「子どもの表面にあらわれた姿のみに目を向けてしまう」ことにつながりかねないという点である(塚本 2018 : 25)。

こどもの内面的な思いや考え、気持ちや感情の変化を、表面的ではなく、真に理解をするためには、こども本人の内面だけでなく、こどもが「経験や環境とのかかわり」の影響を受けやすい存在であることをこどもに携わる者は理解していなければならない(塚本 2018 : 17, 25)。

このようにこども理解には、こどもの経験や環境のかかわりへの理解は必要不可欠であるといえる。

### 4) サウンド・エデュケーション

サウンド・エデュケーション(Sound Education)という用語は、R.Murray Schafer に師事した研究者で、日本国内のサウンドスケープ研究の第一人者として著名(谷中 2009 : 36)と評される、鳥越けい子によって「身近な環境に耳を傾けるための〈聴く技術〉の回復と育成のために開発された教育活動の総称、サウンドスケープ思想に基づいた独自の教育プログラムの総称」と定義されている(鳥越 2004 : 393-397)。

ここでいう「独自のプログラム」について、神林は、その他のプログラムと区別して「シェーファーが開発した教育プログラム」と定めている(神林 2017 : 5)。

そこで、本研究では、サウンド・エデュケーションの定義を「サウンドスケープ、すなわち周りにある全ての音を捉えようとする考えに基づいたものであり、それらをきくための力を育てるプログラム」として用いる。

サウンド・エデュケーションの具体的なプログラムとして、R.Murray Schafer は 1992 年に「A Sound Education : 100 Exercises in Listening and Soundmaking」を上梓し、同年日本において、その翻訳版である「サウンド・エデュケーション」を刊行している。

同書では、サウンド・エデュケーションに関する 100 種類の課題が紹介されている。

この課題は、R.Murray Schafer が、自ら「子どもと大人の双方を対象に実際におこなってみたことのあるもの」(R. Murray Schafer 1992 : 6) をもとにしている。

ここまでの記述の中でも、サウンド・エデュケーションの表記に関して、R.Murray Schafer の開発した教育プログラムとして用いる場合と、同じタ

イトルの著書名として用いる場合がある。

そこで、本研究においては、混在することを避けるため、特別な記述がない限り、前者の意味で用いる際は、アルファベット表記で「Sound Education」とし、後者の場合は、カタカナ表記で「サウンド・エデュケーション」として表記し、用語を用いた。

## 5) 音さがしの本

1996年に日本のサウンドスケープ研究者の一人でもある今田匡彦との共著によって、日本で刊行されたのが「音さがしの本」である。

Sound Educationに関する100の課題を示した課題集であるが、その構成は「サウンド・エデュケーション」と概ね同様であり、より小さな子どもたちが、個人でもグループでも、自分たちでできる内容に再構成等の工夫が施され、子どもにとって、よりわかりやすく、取り組みやすい内容となっている(R. Murray Schafer 1996: viii-ix)。

同書では「うるさすぎる環境から子どもたちを遠ざけるよう注意する必要がある」(R. Murray Schafer 2009: iii)と求めており、こどもと、こどもに携わるすべての者が、周りのサウンドスケープについて自ら意識し考えることで、その周りの音環境がより良いものへと変わっていくと考えられる。

本研究では「サウンドスケープへの意識や、こども理解を深める」ということを目的としていることから、そのための教育プログラムとして「音さがしの本」を手がかりとして用いることとした。

## II. 先行研究の検討

### 1. こどもと音

こどもは、幅広い周波数帯域の音をそのままきいており、特定の周波数帯域を予測的・選択的に聴取することができないとされている(Lunne A. Werner and Boike 2001: 2103)。

幅広い周波数帯域のなかから、特定の周波数帯域をきき分けることのできる能力は、「選択的聴取(selective listening to speech)」<sup>2)</sup>や、「カクテルパーティー効果(cocktail-party effect)」<sup>3)</sup>などと呼ばれている。

このような周りの環境音のなかから、必要な音をきき取ることができるこれらの能力は、5歳以

降に顕著に向上することが示唆されている(嶋田・志村・小西 2019: 115)。

すなわち、本研究において対象としている未就学児のこどもにとって、音をきき分ける能力は発達段階にある。

そのため、こどもは、自らの周りにあるすべての音を「そのままきいている」という状況にあるということもできるだろう。

きき分ける能力が発達し、身につくことで、身近な自分の周りにあるすべての音である「サウンドスケープ」から、必要な音だけを取り除いてきいている。

このことは、その場の「サウンドスケープ」がいわゆる「騒音」であっても、それを「気にしない」あるいは、「きかない」ということが、意識せずともできているのである。

一方で、こどもは、前述のような環境下におかれた場合、すべての音をきいている。そのため、生活をする上で、こどもがどのような音をきいているのかを理解するのは、きき方・きこえ方が異なるため困難といえる。

### 2. こどもを取り巻く音環境

騒音や環境に関して、日本では社会問題のひとつとして注目されることも多く、人々の関心が向けられる機会も少なくはない。

国は法律に基づいた取り組みも進めており、環境の保全に関する基本法である環境基本法(平成5年法律第91号)では、騒音等の音環境から生活を保全し、人々の健康を保護することを目的とした「騒音に係る環境基準」を定めることを規定し(同法第16条第1項)、同基準は環境省から発出され、地域の類型や、時間の区分ごとに基準が設けられ、それらの基準を維持することが「望ましい」として示されている。

地域の類型の一例として、療養施設、社会福祉施設等が集合して設置される地域(地域の類型「AA」)や、専ら住居の用に供される地域(同「A」)などが示されているが、特段こどもの生活を意識した類型ではない。

また、時間の区分としては、昼間(午前6時から午後10時)と夜間(午後10時から午前6時)の2つに区分され、時間についても、こどもの生活を意識した時間別といった区分ではないといえ

る（環境省 2012）。

こどもが、自宅以外の場所で、日常的に生活を営む代表的な場所として、保育所と幼稚園があげられるが、それぞれには設置や運営に関する基準が設けられている。

保育所は、児童福祉法（昭和 22 年法律第 164 号）に基づく「児童福祉施設の設備及び運営に関する基準」を厚生労働省が発出し（厚生労働省 2022）、幼稚園は、学校教育法（昭和 22 年法律第 26 号）に基づき「幼稚園設置基準」を文部科学省がそれぞれ発出している（文部科学省 2014）。

これらの基準には、定員人数や、施設の面積に関する基準が定められているが、「音」に関する基準について明確には示されていない。

なお、学校教育法に定められた学校については、学校保健安全法（昭和 33 年法律第 56 号）に基づいて、文部科学省が定める「学校環境衛生基準」の第 1 に、教室内の「望ましい騒音レベル」について基準が設けられている（文部科学省 2022）。

このように、こどもに限らず社会全般の騒音について定める「騒音に係る環境基準」はおろか、学校の環境に係る基準である「学校環境衛生基準」であっても、「望ましい」という記述にとどまっているのが現状であり、学校教育法による学校ではない「保育所」に至っては、厚生労働省が定める基準に、望ましい姿の記述すら明確にはみられない。

このような日本の音環境の状況によって、こどもがいわゆる「騒音」に囲まれていることが指摘されている（吾田 2012：77）。

また、騒音の度合いによっては、こども同士や、保育者とこどもが円滑なコミュニケーションをとることが困難な状況にあることが報告されている（志村 2003：123）。

こどもは大人よりも音に対して敏感な存在であるにも関わらず、日常的に「騒音」に囲まれている現状について理解をする必要がある。

また、さらなる問題は、決してこどもだけの問題ではないということである。

保育者や教育者、保護者も含む「こどもに携わるすべての者」も、同様の環境下に日常的にさらされている。

これまでに保育室内の環境音について、幼稚

園・保育所の設置基準に音に関する基準が設定されている諸外国の保育者と、日本の保育者を比較した志村による先行研究もある。

志村は、日本の保育者と諸外国の保育者を比較して、前者は騒音に対して、気にしているが慣れてしまっているという現状を指摘している（志村 2016：148）。

このような状況を改善するために、保育者が、自らの周りの音に対して関心を高め「サウンドスケープ」の手法を用いることの有用性も示している（志村 2016：148）。

### 3. 「きくこと」を通したこども理解とサウンドスケープ

サウンドスケープを意識し、理解するために必要な手法として、その場のサウンドスケープを「きくこと」が重要である。

R.Murray Schafer は「サウンド・エデュケーション」の冒頭で「聴覚および聴覚的想像力に関する課題は最初のほうに」（R.Murray Schafer 1992：6）と述べており、100 の課題のうち、1 つ目の課題は、きくことから始まっている。これは、「音さがしの本」においても同様の構成となっている。

R. Murray Schafer は、「サウンド・エデュケーション」の課題を 1 つ目の課題から順に系統的に行うことを推奨してはいないが、どちらの書においても、きくことを念頭においた構成といえる。

小松は、Sound Education について「きく力を養うための音の教育プログラムである」と述べ（小松 2022：31）、同書の課題を通して、サウンドスケープをきくための力を身につけ、理解するためのものであるとしている。

このように、きくことを重要視している背景には、ヒトが成長過程に伴い、自分の周りを取り囲む無数の音の中から、自分にとって「必要な音」という特定の音だけに焦点を当てて聴取していることがあげられる。

このようなきき方について、小松は「経験的に身につけてきた枠組み」が、きき方に影響を与えている（小松 2013：32）。

そのため、サウンドスケープを意識し、理解するためには、「Sound Education」をとおして、周りのサウンドスケープをきくという行為が、重要である。

普段、無意識のうちにきかなくなっている音に「意識的に」耳を傾けることで、サウンドスケープを正しく理解することにつながる可能性がある。

さらに、R.Murray Schafer が「サウンド・エデュケーション」の1つ目の課題の中で求めているように、「きくという習慣を身につける」(R.Murray Schafer 1992: 11) ことにつながっていく。

このように、こどもを取り巻くサウンドスケープを理解するためには、まず意識的にきくことにより、その後の活動へと生かすことができるのである。

#### 4. 「沈黙」を意識的にきく

きくための課題は「沈黙」という状態へとつながることが西田の先行研究によって示唆されている。

西田は「サウンド・エデュケーションは沈黙をきくための具体的な課題集」(西田 2011: 112) と述べ、サウンド・エデュケーションのねらい・目標は「沈黙」であるとしている。

その根拠として、R.Murray Schafer の主著である *The Tuning of The World* の序章「Introduction」と第19章「Silence」にて「沈黙」について記述されている点を挙げている(西田 2011: 111) (R.Murray Schafer 1977: 3-12, 293-259)。

多くの音楽は、演奏の前後に、音を演奏しない時間があり、開始音と終止音の前後には「沈黙」が存在する。それら前後も含めてひとつの「音楽」と捉えることもできるならば、その「沈黙」という音であるサウンドスケープを一つの音楽として捉えることもできるだろう。

このように R.Murray Schafer は、「すべて沈黙をもって終わらなければならない」(R.Murray Schafer 1977: 12) と述べており、サウンド・エデュケーションにおいても「沈黙」を重要視していた。

また、こどもへ直接的に携わる活動においては、「音を発する活動」が多くみられる。

保育の現場で例えると、ピアノ伴奏で歌を歌う活動や、外で声を出す遊び、絵本の読み聞かせやパネルシアター、手遊びなどの活動が挙げられ、日常的に多くの音を発している。

R.Murray Schafer が音楽の前後に存在する「沈黙」を重要視したように、こどもが取り組む「音

を発する活動」においても、活動の前後に存在する「沈黙」に意識を向けて活動をすることが「Sound Education」において、重要視すべき点として挙げることができる。

こどもの周りには既に多くの音があるため、それをきくためには余計な音を追加せず、逆に減らすようなアプローチも必要である。

きくことを通して、普段ないがしろにされてしまう「沈黙」に意識を向けることで、こども理解を深めることができると考えられる。

#### 5. 分類による分析

サウンドスケープの分析において、まず分析者が実施すべきこととして、「そのサウンドスケープの重要な特徴を発見すること」(R.Murray Schafer 2022: 36) があげられる。

R.Murray Schafer は「サウンドスケープの重要な特徴を発見する」ために、「分類」という分析方法の有効性について「なぜ分類か？われわれは類似性や対照、パターンを見出すために情報を分類する」(R. Murray Schafer 2022: 283) と述べ、サウンドスケープを分類することで、そのサウンドスケープは他のサウンドスケープと類似点があるのか、他とどのように異なるのかという特徴を発見することができるとしている。

そこで、本研究においては、R.Murray Schafer が提示している分類方法の中から「音の指示機能による分類」を参考とした(R.Murray Schafer 2022: 291)。

音の指示機能による分類とは文字通り、言葉を用いて「指し示す」という意味であり、発生している音そのものに言葉を与えることで、その音の分類を明らかにする分類方法である。

この分類方法に対して R.Murray Schafer は「ある程度独断的にならざるをえない」(R.Murray Schafer 2022: 291) と述べており、分類する側(分析者)の独断によって成立するシステムであることがわかる。

具体的な分類について、本研究では、世界的なサウンドスケープ研究のプロジェクトである「ワールド・サウンドスケープ・プロジェクト(World・Soundscape・Project, WSP)」<sup>4)</sup>が開発した分類表をベースにして用いることとした(R. Murray Schafer 2022: 291-295)。

この分類表は、サウンドスケープを提唱した R.Murray Schafer も、「出会った音の分類のすべてに対応できている」(R.Murray Schafer 2022 : 291) と評価している。

表 1. 音の分類表

| 分類           | 小分類                  |
|--------------|----------------------|
| Ⅰ. 自然音       | A. 天地創造の音            |
|              | B. 黙示録の音             |
|              | C. 水の音               |
|              | D. 大気の声              |
|              | E. 大地の音              |
|              | F. 火の音               |
|              | G. 鳥の声               |
|              | H. 動物の音              |
|              | I. 虫の音               |
|              | J. 魚・海洋生物の音          |
|              | K. 四季の音              |
| Ⅱ. 人間の音      | A. 音声                |
|              | B. 人体の音              |
|              | C. 衣類の音              |
| Ⅲ. 音と社会      | A. 田舎のサウンドスケープの一般的記述 |
|              | B. 町のサウンドスケープ        |
|              | C. 都市のサウンドスケープ       |
|              | D. 海のサウンドスケープ        |
|              | E. 家庭のサウンドスケープ       |
|              | F. 商売、職業など仕事の音       |
|              | G. 工場、事務所の音          |
|              | H. 娯楽の音              |
|              | I. 音楽                |
|              | J. 儀式と祭              |
|              | K. 公園、庭園             |
|              | L. 宗教祭礼              |
| Ⅳ. 機械音       | A. 機械 (一般的記述)        |
|              | B. 工業や工場の設備 (一般的記述)  |
|              | C. 輸送機関 (一般的記述)      |
|              | D. 戦争機械              |
|              | E. 列車や電車             |
|              | F. 内燃機関              |
|              | G. 航空機               |
|              | H. 建設と取りこわしの音        |
|              | I. 機械道具              |
|              | J. 換気装置と空調機          |
|              | K. 戦争と破壊のための道具       |
|              | L. 農機具類              |
| Ⅴ. 静寂と沈黙     |                      |
| Ⅵ. 指示装置としての音 | A. ベルとゴング            |
|              | B. ホーンと笛             |
|              | C. 時間の音              |
|              | D. 電話                |
|              | E. (その他の) 警報装置       |
|              | F. (その他の) 喜びを知らせる信号  |
|              | G. 未来の出来事を告げる音       |

(「R.Murray Schafer 2022 : 292-295」を参考に筆者作成)

表 1 に示した分類表は、大きく 6 つに分け、「Ⅰ. 自然音」、「Ⅱ. 人間の音」、「Ⅲ. 音と社会」、「Ⅳ. 機械音」、「Ⅴ. 静寂と沈黙」、「Ⅵ. 指示装置としての音」に分類をしている。

また、より具体的な音を示しながら、細分化し

た分類 (小分類) を、大きな分類ごとに設けている。

例えば、大きな分類で「Ⅰ. 自然の音」と示されるなかには、11 の小分類が設けられ「水の音」や「大気の声」、「動物の音」などが細かく挙げられる。

なお、この小分類については、分類によって数が異なり、「Ⅴ. 静寂と沈黙」のように小分類の設定がないものも存在する。

この小分類は、Ⅰ～Ⅵの大きな分類に分ける際の目安となる例示と捉えることとした。

本研究においては、これらの分類の区分がわかりやすいように、大きな分類についてはローマ数字を頭に設け、小分類は大きな分類ごとにアルファベットにて表記した。

### Ⅲ. 実証研究とその結果

#### 1. 実証研究の概要

本研究では、「音さがしの本」で示されている課題集のなかから、3 つの課題について、実際に実証的に実施し、その後「こどもにとって「音」とは」という問いに対して、「一言」で発表を行うことで、各々の学びを振り返りながらまとめ、こども理解にどのような影響をあたえるのかといった実証研究とその分析に取り組んだ。

#### 2. 「音さがし」の実施

本研究における「音さがしの本」を用いた実証研究は、S 短期大学が設置している「こども学」の講義において、当該科目を受講する学生 (以下「受講生」) の協力のもと実施した。

保育の対象の理解に関する科目として設置する「こども学」の授業は、1 年次配当科目として半期に全 15 回の授業が計画され、到達目標として「「子ども」についての概念を理解できる。」と示されている。

本講義のうち、1 コマ (90 分) を中心に、その前後の授業の一部の時間を用いて、計 3 つの課題を実践した。

##### 1) ウォーミングアップ「耳をすましてみよう」

本課題は「音さがしの本」において、提示されている 100 の課題のうち、最初の課題 (1 つ目) として紹介されている「耳をすましてみよう」である。

この課題について、同書には具体的に次のように記述されている。

ほんの少しのあいだ、すごく静かにすわってみよう。そして耳をすましてみよう。今度は紙に聞こえた音をぜんぶ書き出してみよう。

みんなそれぞれ違った音が聞こえたかな。

大きな声で、クラスみんなに向かって音のリストを読んでみよう。それからみんなが読んだ音を聞いてみよう。

ほかの人たちは、あなたが聞かなかった音を聞いていただろうか？

(R. Murray Schafer, 今田 2009 : 3)

課題の実施に際しては、教室で実施し、担当教員がおおよそ1分間測定し、開始の合図とともに「周りの音をきく」ように指示した。

受講生たちは、この間集中して静かに耳をすませ、周りの音をきいていた。

測定時間の終わりを告げると同時に、きこえてきた音を各自が自由にメモとして記録を残し、その後、相互に発表をした。

受講生から発表の際にあがった、主な「きこえてきた音」をまとめたものが表2である。なお、表2における音の表現については、受講生の表現をそのまま記載した。

表2. 教室内できこえてきた音

- ・鳥の鳴き声
- ・木の葉っぱが揺れた音
- ・他教室の人の声
- ・廊下の話し声
- ・洋服の音
- ・椅子が軋む音
- ・何かの機械がブーと鳴る音
- ・足音
- ・風でドアが揺れる音
- ・靴が擦れる音
- ・自分の呼吸音
- ・風の音
- ・耳鳴り

1) のウォーミングアップのあと、2つ目の課題として取り組んだのが「音さがしの本」において、35番目に紹介されている課題「いろいろな音を想像する」である。同書には、具体的に次のように記述されている。

さて、とても静かにすわって、目を閉じてみよう。これからいくつか音を言うので、あなたの心の中の耳で、その音を想像してみよう。みんなが静かにしていたら、たぶんほんとうにその音が聞こえてくるだろう。

(R. Murray Schafer, 今田 2009 : 48)

この課題では、大学のキャンパス内を対象範囲に設定し、その範囲の音を想像させることを目的に、担当教員から受講生に対して、大学キャンパス内の施設を紹介しながら、そこで発しているような「音」を自由に挙げさせることとした。

S短期大学のキャンパスは「こども学」を専攻とする学科を設置していることもあり、こども理解を深めることのできる教育環境が整えられている。

具体的には、保育所や幼稚園を模した「模擬保育室」や、中庭に配置された「木製小屋」、「学生食堂（カフェテリア）」、「体育館」などがあり、それぞれの場においてどのような「音」があるのかを想像することとした。

受講生が想像した音をまとめたものが、表3である。

受講生の想像からは、普段はあまり利用しないであろう「事務室」や、「廊下」、「階段」といった場所も含めて、想像した音が挙げられていた。

このうち「廊下」の「外で遊ぶ子どもの声」や「屋外」の「遊具で遊ぶ音」が想像されるのは、おそらく大学キャンパスと隣接する小学校からきこえてくる音であると考えられる。

また、キャンパス内という範囲を設定したものの、「屋外」には「バスが走る音」がある。これは、大学構内を通学等に利用するバスが運行していることが影響を与えている可能性があり、「工場の音」は隣接する工場が影響しているのではないかと考えられる。

2) 音のイメージを想像する「いろいろな音を想像する」



表 3. 想像した音の場所と音の説明

| 場所               | 想像した音（順不同）                                                                             |
|------------------|----------------------------------------------------------------------------------------|
| 学生食堂<br>(カフェテリア) | 料理する音、食器の音、水の音、お金の音、話し声、テレビの音、ボタンの音、券売機の音、食べる音                                         |
| 音楽室              | ピアノを弾く音、楽器の音、歌声、先生の声、ホワイトボードの音、楽譜を開く音、呼吸する音、椅子の音、ピアノの蓋を開け閉めする音、ピアノのペダルを踏む音             |
| 図書館              | 本をめくる音、本を触る音、足音、話し声、本を置く音、呼吸する音、電気の音、パソコンの音                                            |
| コンピュータ室          | パソコンの音、キーボードの音、マウスの音、機械の音、印刷する音                                                        |
| 教室               | ホワイトボード音、椅子の音、紙の音、先生の声、鉛筆の音、消しゴムの音、プロジェクターの音                                           |
| 模擬保育室            | 積み木の音、おもちゃの音                                                                           |
| 木製小屋<br>(中庭に配置)  | 虫の声、床がきしむ音、ピアノの音、鳥の声、葉っぱの音、木の音、除草機の音                                                   |
| 事務室              | 話し声、機械の音、足音、書類に触れる音、ドアの音、印刷する音、ハンコを押す音、電話の音、飲み物を飲む音、水筒やペットボトルを開け閉めする音、袋の音              |
| 体育館              | 人が動いている音、靴の音、ボールの音、ラケットの音、叫び声、笛の音、送風機の音                                                |
| トイレ              | 水の音、トイレトペーパーの音、ドアの音、トイレ用擬音装置の音、話し声                                                     |
| 廊下               | 外で遊ぶ子どもの声、風の音、話し声、足音、ドアの音、掲示物が風で動く音、笑い声、オルゴールの音、パソコンの音                                 |
| 階段               | 人が動いている音、足音、話し声                                                                        |
| ロッカー             | 扉を開く音                                                                                  |
| 自動販売機            | ジュースが落ちる音、お金の音                                                                         |
| 昇降口・下駄箱          | 傘の音、下駄箱を閉める音、靴を置く音                                                                     |
| 屋外               | バスが走る音、砂利の音、葉っぱの音、風の音、鳥の声、話し声、車の音、バイクの音、犬の鳴き声、電車の音、カエルの音、虫が飛ぶ音、草を刈る音、飛行機の音、工場の音、遊具で遊ぶ音 |

3) 音を録音して集める「いろいろな音を録音する」

2) において、大学のキャンパス内にある「音」の想像をふくらませたのち、実際にそれらの「音」を探しにいくために3つ目の課題として「いろいろな音を録音する」を実践した。

「音さがしの本」において、67 番目に紹介されている課題であり、同書には具体的に、次のように記述されている。

持っていない人がいると困るから、今までテープレコーダーを使った課題をしなかった。でももし持っていたら、いろいろな音を録音してみよう。

最初は、家の中や外、違った場所からいろいろな音を録音してきて、それらをくらべてみよう。それぞれの場所で、自分の名前も録音してみよう。もしそこがうるさかったら、叫ぶように大きな声を出さなきゃならない。でももし静かだったら、小さな声でも平気だろう。

(R. Murray Schafer, 今田 2009 : 92)

この課題では、ICT 教材を活用した録音や記録等の活動を円滑に進めることや、録音作業に集中することで、周囲への安全配慮の問題も不安が生じないように、受講生を4～6名前後のグループに分けることとした。

各グループに、それぞれ1台のICT教材端末(iPad)を貸与し、大学のキャンパス内全域(屋内・屋外を問わない)を活動の範囲として自由に「音」を探し、録音するように指示をした。

必ず受講生1人あたり1つ以上の音を録音することを伝え、音の収録時には「自分の名前」もあわせて録音させた。

その結果、受講生が録音して探してきた音は、34種類、74件であった(表4)。なお、「食堂の水の音」と「食堂の皿を洗う音」というように、同じ場所で、同じような音であると考えられる音については一つの種類として扱い、「件数」はその同じ音を挙げた件数を累計した「延べ数」である。

次に、これら进行分析するために受講生が録音してきた音を分類し、一覧にしたものが表5である。表における「音の種類」は受講生が実際に挙げた音であり、件数は重なっているものを積算した数値を表し、件数が多ければ多いほど、類似する音を見つけた受講生が多いことを示す。

また、「分類」は、表1の分類にあわせて、どのような音を録音してきたのかについて、筆者が独自に分類したものである。

なお、表1では、小分類まで示しているが、小分類の具体的な記載は、「大きな分類に分けるための参考」にするために例示している分類であると捉えて分析をしたことから、ここでは大きな分類であるⅠ～Ⅵで分類をしている。

表4. 拾ってきた音リスト

| 番号 | 音の種類      | 件数 |
|----|-----------|----|
| 1  | 鳥の声       | 5  |
| 2  | 体育館の音     | 1  |
| 3  | 本をめくる音    | 5  |
| 4  | 授業中の教室の音  | 2  |
| 5  | 扉・ドアの音    | 3  |
| 6  | 消毒液の音     | 2  |
| 7  | オルゴールの音   | 2  |
| 8  | 食堂（水）の音   | 4  |
| 9  | トイレの水の音   | 3  |
| 10 | 階段の足音     | 1  |
| 11 | 水道の音      | 4  |
| 12 | 黒板・チョークの音 | 3  |
| 13 | お金の音      | 1  |
| 14 | ピアノの音     | 6  |
| 15 | ブロックの音    | 1  |
| 16 | 食堂（調理）の音  | 3  |
| 17 | 廊下の足音     | 2  |
| 18 | 傘の音       | 2  |
| 19 | お金の音      | 2  |
| 20 | トイレの音姫の音  | 1  |
| 21 | 芝生の足音     | 4  |
| 22 | 体温計の音     | 1  |
| 23 | 台車の音      | 1  |
| 24 | 事務室の音     | 2  |
| 25 | 葉っぱを踏む音   | 1  |
| 26 | ロッカーの鍵の音  | 2  |
| 27 | 木がこすれる音   | 1  |
| 28 | 積み木の音     | 1  |
| 29 | 床の足音      | 3  |
| 30 | 風の音       | 1  |
| 31 | 葉っぱの音     | 1  |
| 32 | 室外機の音     | 1  |
| 33 | 自動販売機の音   | 1  |
| 34 | ペンの音      | 1  |

全 74 件のデータをもとに、Ⅰ～Ⅵまでの大きな分類で分類したところ「Ⅰ. 自然音」が 4 種類 8 件、「Ⅱ. 人間の音」が 7 種類 14 件、「Ⅲ. 音と社会」が 19 種類 48 件、「Ⅳ. 機械音」が 4 種類 4 件、「Ⅴ. 静寂と沈黙」及び、「Ⅵ. 指示装置としての音」に該当する項目は 0 件という結果となった（表 5）。

表5. きこえた音の分類

| 音の種類      | 件数 | 分類     |
|-----------|----|--------|
| 鳥の声       | 5  | Ⅰ 自然音  |
| 体育館の音     | 1  | Ⅱ 人間の音 |
| 本をめくる音    | 5  | Ⅲ 音と社会 |
| 授業中の教室の音  | 2  | Ⅱ 人間の音 |
| 扉・ドアの音    | 3  | Ⅲ 音と社会 |
| 消毒液の音     | 2  | Ⅲ 音と社会 |
| オルゴールの音   | 2  | Ⅲ 音と社会 |
| 食堂（水）の音   | 4  | Ⅲ 音と社会 |
| トイレの水の音   | 3  | Ⅲ 音と社会 |
| 階段の足音     | 1  | Ⅱ 人間の音 |
| 水道の音      | 4  | Ⅲ 音と社会 |
| 黒板・チョークの音 | 3  | Ⅲ 音と社会 |
| お金の音      | 1  | Ⅲ 音と社会 |
| ピアノの音     | 6  | Ⅲ 音と社会 |
| ブロックの音    | 1  | Ⅲ 音と社会 |
| 食堂（調理）の音  | 3  | Ⅲ 音と社会 |
| 廊下の足音     | 2  | Ⅱ 人間の音 |
| 傘の音       | 2  | Ⅲ 音と社会 |
| お金の音      | 2  | Ⅲ 音と社会 |
| トイレの音姫の音  | 1  | Ⅳ 機械音  |
| 芝生の足音     | 4  | Ⅱ 人間の音 |
| 体温計の音     | 1  | Ⅳ 機械音  |
| 台車の音      | 1  | Ⅲ 音と社会 |
| 事務室の音     | 2  | Ⅲ 音と社会 |
| 葉っぱを踏む音   | 1  | Ⅱ 人間の音 |
| ロッカーの鍵の音  | 2  | Ⅲ 音と社会 |
| 木がこすれる音   | 1  | Ⅰ 自然音  |
| 積み木の音     | 1  | Ⅲ 音と社会 |
| 床の足音      | 3  | Ⅱ 人間の音 |
| 風の音       | 1  | Ⅰ 自然音  |
| 葉っぱの音     | 1  | Ⅰ 自然音  |
| 室外機の音     | 1  | Ⅳ 機械音  |
| 自動販売機の音   | 1  | Ⅳ 機械音  |
| ペンの音      | 1  | Ⅲ 音と社会 |

### 3. こどもにとって「音」とは

3つの課題を終えた後、受講生に対して担当教員は「こどもにとって「音」とは？」という問いを投げかけた。

この問いに対して、自由に「一言」で発表するように指示し、受講生それぞれが、自らの言葉で「一言」で表現した（表 6）。

表 6 では、「生活する上で欠かせないもの」と「生活の一部」のように、近似する場合に、表中において「，」を用いてつないで記述した。

表 6. こどもにとって「音」とは

|                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                         |
|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| <ul style="list-style-type: none"><li>・生活する上で欠かせないもの、生活の一部</li><li>・たくさんの体験ができる</li><li>・成長に欠かせない</li><li>・耳の成長</li><li>・表現力を豊かにする</li><li>・不思議なもの</li><li>・日常の刺激、毎日ふれるもの</li><li>・自然、自然に興味をもつ、自然を楽しむ、自然にふれる、最初の一步、自然を学べる</li><li>・楽しむもの、楽しいもの</li><li>・必要不可欠なもの</li><li>・感性を豊かにする、感情が豊かになる、喜怒哀楽</li><li>・新たな発見</li><li>・個性の一つ</li><li>・無意識に聞いている</li><li>・コミュニケーションの一部</li><li>・面白い、ワクワク</li><li>・遊びの一つ、遊びの材料</li><li>・怖いもの</li><li>・誰でも知っているもの</li><li>・情報</li><li>・学ぶために必要なもの</li><li>・興味をもつものの一つ</li><li>・刺激</li><li>・知識</li><li>・触れることができないけどある不思議なもの</li><li>・安心、リラックス</li><li>・何もしなくてもあるもの</li><li>・自分にも出せるもの</li><li>・強弱があって色々なものが重なる</li></ul> |
|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|

#### IV. 考察

本研究は、保育者・教育者はもとより、保護者も含めて、こどもに携わるすべての者にとって必要不可欠なこども理解を深めるにあたって、こどもの環境に着目し、特にこどもを取り巻く音の環境（サウンドスケープ）へ意識を向けることが、こどもへの理解をより深めることにつながるのかを考察することを目的に、先行研究をもとにした文献調査および実証研究に取り組んだ。

先行研究では、文献調査をもとに大きく3点の視点で分析を行った。

まず1点目が、こどもが「音」をどのように認識をしているのかについてである。「音」をきき分けることのできる「選択的聴取」や「カクテルパーティー効果」といった能力は、こどもにとっ

て発達段階にあることから、こどもが自ら耳にする「音」を選ぶことは難しい。

このことは、こどもの周辺にあるすべての「音」を、自らの意志等に関係なく受け入れなくてはならないということでもあり、音に対して「敏感にならざるをえない存在」いうことであるともいえる。

例えば、心地よいとはいえない「騒音」と呼ばれるような音であっても、心地よいと感じる音であっても、こどもは同じようにきこえる（きこえてしまう）のである。

このような、こどもの周辺に存在する「音」への認識や、聴取する能力の発達段階を踏まえると、こどもの周りにある音環境からこども理解を深めるには、特定の音だけを考えるのではなく、周りの環境に存在する「すべての音」を捉える必要があるといえる。

しかし「すべての音」を捉える際には、きき分ける能力の発達段階が異なれば、きこえる音やきこえ方も異なるということを十分に留意しなければならない。

保育者・教育者や保護者の多くは、すでにきき分ける能力が身についているため、能力が発達段階にあるこどもが、どのような音をきいているのかを把握するのは、意識なしには困難であるともいえる。

だからこそ、「我々の周りに存在するすべての音環境」であるサウンドスケープに対して、意識的に向き合わなければならない。

このように、こどもの周りにある音環境を意識的に捉えることをとおして、こども理解につなげて考えていく必要があるのではないだろうか。

こども理解を深めるにあたって、音の環境（サウンドスケープ）へ意識を向けることの意義は明らかであろう。

次に2点目であるが、こどもを取り巻く音の環境に対する日本における対応について先行研究の分析をするため、特に保育や幼児教育の場であり、こどもにとって生活の場の一つである「保育所」や「幼稚園」に着目をした。

日本では、保育所や幼稚園の設置に関して、それぞれの根拠法令に基づいた基準が、所管している省庁によって定められている。

それぞれの基準では、定員人数や面積など施設

環境について明記がされているものの、「音」に関する基準は明確に示されていないことがわかった。

しかし、「音」は前述のとおり、こどもにとって、否応なしにすべての音を受け入れなくてはならないという状況を踏まえると、施設や機能を考える上で重視しなければならない事項のひとつであるといえるが、施設や施設設備そのものといった、いわゆる「ハード面」での対応には、設置基準の改正を要することや、予算措置の課題などがあり、難点も多いのみならず、その対応にあたっては即時性に欠けるだろう。

さらに、サウンドスケープは施設の立地の条件や、施設の周辺環境にも左右されるが、これらを含めて考えると、ハード面の対応が困難であるケースも大いに想定されることである。

そこで、施設内で行われる保育・教育の内容の工夫や、保育者や教育者をはじめとする保護者等のこどもに携わるすべての者による、いわゆる「ソフト面」での対応が求められるのではないだろうか。

特にこどもを理解し、専門的知見や技術を有している保育者や教育者であったとしても、日常的环境に「慣れ」が生じているという現状が先行研究においても指摘されている。

その「慣れ」は、選択的聴取などのきき分ける能力によって、こどもにはきこえる「雑音」や「騒音」も、きき分ける能力が身につけていることで、無意識のうちに音として捉えることを回避しているために、きこえていない可能性もある。

このことは、こどもだけの問題ではなく、選択的聴取などの能力によって、きき分けているだけで、実際には誰もが日常的に「騒音」に囲まれている現状が、保育所や幼稚園にもある可能性もあるのではないだろうか。

改めて保育者・教育者はもとより、保護者も含めて「こどもに携わるすべての者」がサウンドスケープを意識し、改善の視点をもって考えていくことの必要性を示すことができた。

最後に3点目として、音を「きくこと」を通した、こども理解とサウンドスケープについて考察をしたい。

これまでの先行研究の分析と考察から、こどもの周辺に存在する「音」を認識し、サウンド

スケープの重要性を理解することが、ひいてはこども理解につながる可能性について検討してきたが、そのためには、こどもの周辺に存在する「音」に意識を向けなければならない。

意識を向けるためには、音をきくということからは始める必要があるという指摘が、これまでの先行研究で示されているものの、「音」という日常にありふれたものであるからこそ、「慣れ」が生じ、意図的に意識を向けさせる教育手法を用いることが有用である可能性がわかった。

こどもと直接的に携わる活動において、保育の現場における活動を事例にあげても、ピアノ伴奏で歌を歌う活動や、絵本の読み聞かせなど、いずれも、声や楽器などで音を発する行為を伴う活動が多く見られる。

しかし、この傾向は保育の現場に限った話ではない。

ピアノなどの楽器等を必要するものは、楽器を用意しなければならないし、楽器を用いることができる場所でなければ難しいが、こどもと歌を歌ったり、子守唄に代表されるように歌をきかせたりする活動、絵本の読み聞かせといった活動は、日常的にこどもの生活のなかで営まれることであり、「音を発する行為を伴う活動が多い」という傾向は、こどもを取り巻く日常生活全般にいえることともいえる。

このように、こどもにとって「音」は日常的にあふれんばかりにあるものであるが、サウンドスケープにおける「きく」という行為は「沈黙」と向き合いながら、それ自体を「きく」という行為でもある。

普段は意識しない「沈黙」をきくことで、意図的に発しない音に意識を向けながら、こどもを取り巻くサウンドスケープについて気づきを得ることは、意識を高める上で重要であろう。

そこで、具体的な教育的手法（プロセス）として、本研究ではこども向けの課題集である「音さがしの本」を用いることとした。

しかし、音をきくだけでは、こども理解につながったのかを説明することが難しい。

そのため、音をきくことをとおして、「どのような音がきこえたか」などをデータとして取得し、きこえた音の種類を分類することで、サウンドスケープの特徴の発見を促し、こどもの理解につな

げていく実証的な研究を試みることにした。

これまでに「音さがしの本」を用いたサウンドスケープに関する教育実践の事例がいくつか報告されているものの（大石 2005, 神林 2017, 二宮 2018 ほか）、本研究のように、こども理解を目的としたサウンドスケープに関する実践的な研究を確認することはできなかった。そこに、本研究の新規性とオリジナル（独自）性があることを明確にすることもできたともいえる。

次に、実証研究では、先行研究の分析をもとに「音さがしの本」に示された課題が、こども理解につながるのかについて実証的な研究と、そこから得られた実証データの分析をもとに検討と考察を行った。

本研究では実証的に行った3つの課題をとおして、日常に存在する「音」へ意識を向けることにつながったことを示す回答が得られた。

ウォーミングアップの意味合いも込めて行った1つ目の「耳をすましてみよう」の課題においては、研究に協力した受講生からは「鳥の鳴き声」や「木の葉っぱが揺れた音」、「風の音」といった、屋外から教室内に届く「自然音」に耳を傾けていることや、「椅子が軋む音」や「何かの機械がブーと鳴る音」といった室内における「音と社会」「機械音」といった音。さらには「自分の呼吸音」や「耳鳴り」とった「人間の音」をきこえた音として挙げていた。

この課題をとおして、多くの音に気づき、指示された短い時間のあいだ、自らが「静か」にしていたとしても、自らの周りには、たくさんの音があふれ、常に音に囲まれながら生活をしているということ、そのことは自らだけでなく、こどもであっても同じであり、むしろこどもは敏感に感じながら生活をしているということを認識することにつながった。

同時に「音」には多くの種類があるということを理解することで、「サウンドスケープ」の意識づけと、こども理解に向けた、最初のステップにつなげることができたと考えることができる。

さらに、受講生はその場のサウンドスケープをきくという課題を通して、「沈黙」の状態を自ずと作り出していた点も明らかとなった。

その結果を示すように、受講生が「意図的に発した音」は、今回の結果には含まれていないとこ

ろに注目したい。

受講生が挙げた音は、すべて「教室外の音」や、「自然に発生している音」であり、意図的に声を発したり、物音を立てたりする受講生はいなかった。

これまでに「きくこと」が「沈黙」につながるということについては、先行研究において示唆されており、今回の実証研究においても、その示唆が実証的に有効であることを明らかにすることができた。

2つ目に「いろいろな音を想像する」の課題に取り組んだが、教室内に限らず、大学キャンパス内のすべてを対象範囲とし、どのような音がきこえるかを想像したが、屋内外を問わず、多くの場所で、多様な種類の音を挙げていた。

受講生が挙げた場所としては、「教室」、「学生食堂（カフェテリア）」など、多くの学生にとって学生生活に欠かせない項目（場所）が挙げられる一方で、「音楽室」、「模擬保育室」など特徴的な項目（場所）も挙げられた。

このうち「音楽室」の設置は、授業等で音楽を取り扱う大学に限られ、「模擬保育室」は「こども学科」を設置する大学ならではの項目（場所）だろう。

そして、この両方の特徴をあわせもつのは「こども学科」を擁する大学の特徴であるとも考えられ、サウンドスケープの分析に際し、特徴の発見に至ることができた。

この課題をとおして、普段から意識せずに、何気なくきいている音環境は、それぞれの場所や環境によって異なり、それぞれにどのような特徴があるのかを意識することにつながったといえる。

こどもに携わるすべての者にとって、こどもと接する場（例えば、自宅をはじめ、保育所、幼稚園、公園など）は日々変わるが、それぞれのサウンドスケープの特徴について意識を向け、特徴をつかみながら理解をしようとすることで、こどもを取り巻く環境を把握することにつながり、こども理解を深めるにあたって重要な意味を含むと考えられる。

3つ目の課題である「いろいろな音を録音する」では、想像した音や、想像はしていなかったが気になった音を ICT 教材端末（iPad）に記録をしながら、自らが意識的に音を探すために、大学

のキャンパス内を散策した。

教室内できこえてくる音（課題①で取り組んだ内容）や、想像していた音（課題②で取り組んだ内容）をもとにして、想像しえなかった音も含めて、こどもの日常生活や活動のなかで「きこえる音」を意識的に探し、サウンドスケープとして捉えることで、より具体的なこども理解につながるよう働きかけることとした。

きこえた音を WSP による分類表を用いて分類したうえで分析をした結果、いずれも延べ数で「Ⅲ. 音と社会」で 19 種類の音、48 件の回答がもっとも多く、続いて「Ⅱ. 人間の音」が 7 種類の音について 14 件、「Ⅰ. 自然の音」は 4 種類の音で 8 件の回答があるなど、受講生は音さがしにおいて、多様な音に気づいたという結果となった。

分析を試みる中で特筆すべきは、圧倒的に「Ⅲ. 音と社会」に関する音をキャンパス内で耳にしたという受講生が多いという点である。

WSP の分類表においては、「音と社会」の分類を細かく示した小分類には、「田舎のサウンドスケープ」や「町のサウンドスケープ」などが挙げられている。

この小分類の例からは、きこえてきた場所を取り巻く特徴的な地域性や社会性が影響されている音を「音と社会」として分類していると考えることができる。

そこで、筆者は「こども学科」を擁する「大学」の「キャンパス」という特徴的な社会性を重視した分類を行い、分析を試みた。

その結果「ピアノの音」や「本をめくる音」といった「音と社会」に関連する音が多くみられる傾向が明らかとなった。

ピアノの音は、音楽室等でのピアノ伴奏の授業や、自主的な練習のなかで他の学生が演奏の練習をすることで発生している音として想定ができ、本をめくる音は、大学図書館において他の学生が読書をしている際に発生している音であると考えられることから、いずれも「大学」の「キャンパス」という、特徴的な社会性を反映していると考えられる。

これらの結果から受講生は、最初の課題において耳をすませて、音をきくという体験をすでにしているものの、実際に生活している社会において、自然に生じている木々や小鳥の「音」をきく

ことの難しさを擱んだ一方で、サウンドスケープは、普段から生活する社会に直結することであることを踏まえて、こども理解に結びつけられたのではないだろうか。

最後に、「音さがしの本」の課題を終えたあとに、受講生に投げかけた「こどもにとって音とは」という問いに対して、受講生がそれぞれ考えた言葉で表現しながら一言でまとめて発表をしたが、その発表内容からは、こどもにとって「生活」や、「体験・経験」そして「成長」につながるということ。

そして、音が「コミュニケーション」になり「面白い」や「遊び」、「学び」にもつながる一方で、「怖い」ものでもあるということ。

その他には「触れることができない」が、欠かすことのできない「情報」でもあり、「日常・当たり前」にあるといったことに、課題に取り組んだ受講生それぞれが気づいている様子がみてとれる。

このように「音さがしの本」の課題をとおして、こどもを取り巻く環境のなかでも、「音」を意識的に注目することで、普段の生活のなかから感じとり、イメージをするのみならず、自らサウンドスケープをきくという体験をとおして、こどもを取り巻く自然や、施設、社会などの周辺環境から、普段の何気ないサウンドスケープを、意識的に捉えて理解することで「何もしなくてもあるもの」でありながら「必要不可欠なもの」としてその存在を認識するなど、これまで意識せずにいた周りの環境音（サウンドスケープ）に対して、意識を向けようとする様子もみられた。

これらの研究成果の考察から、サウンドスケープを学び、こどもを取り巻く音環境に意識を向けることで、こども理解を深めることにつなげようとしていると考えられる。

## V. 結論

本研究をとおして、こどもを取り巻く環境下におけるサウンドスケープに意識を向けることが、ひいてはこども理解をより深めるための一助となる可能性を示唆することができた。

また、「音さがしの本」に示された課題に取り組むことは、こども理解につながるサウンドスケープの意識づけに一定の有用性があることを示すことができた。

## VI. 本研究の限界と今後の課題

本研究では、「音さがしの本」の課題集で示されている100の課題のなかから、授業との関連性等を踏まえて、3つの課題に絞って実証的な研究を行ったが、残る課題について触れることができなかったことは本研究の限界である。

引き続き「音さがしの本」の分析を含めたさらなる研究が必要であろう。

本研究でテーマとして取り上げたこども理解は、前述のとおり、保育者・教育者ないしは保護者も含めて、こどもに携わる者にとって、「根底になくってはならない」（塚本 2018：3）ものであるが、今回の実証研究の協力者は、いずれも保育者・教育者を目指して専門的な教育を受けている短期大学の学生であり、一定のバイアスが生じていることも否めない。

一方で、本研究の協力者である学生の多くが18～19歳前後であり、近い将来にひとりの保護者となることも考えられる。現在の専攻や目指している職業等に関係なく、「こどもに携わるすべての者」のひとりになり得る存在でもあるということを忘れてはならない。

本研究によって「音さがしの本」の課題集が、こども理解の一助となる可能性について、さらに探するためには、指導法・教授法の研究も欠かすことはできないことであり、今後の課題である。

## 謝辞

本研究にあたっては、協力してくださった受講生の皆様に心から感謝申し上げます。

## 引用文献

- ・ American Psychological Association, 2015. “APA Dictionary of Psychology” (G.R. ファンデンボス 監修, 繁榎算男・四本裕子訳「APA 心理学大辞典」培風館, 2013)
- ・ 吾田富士子. 保育の音環境と保育の質 - 保育者の気付きから吸音材使用に取り組んだ園の音調査から -. 藤女子大学紀要. 2012, 49, p.77-84.
- ・ Barry Truax(ed) . Handbook for Acoustic Ecology. A.R.C.Publication, 1978.
- ・ 権藤真織, 柴ひろ, 戸江茂博. 保育者養成教育の視点からみた「子ども理解」. 神戸親和女子大学児童教育学研究. 2017, p.55-69.

- ・ 川井敬二. 保育施設の音環境保全に向けて - 海外基準と我が国における取り組み -. 日本音響学会誌. 2016, 72 (3), p.160-165.
- ・ 神林哲平. 音の教育がめざすものは何かーサウンド・エデュケーションの目標と評価に関する研究. 大学教育出版. 2017.
- ・ 環境省. 騒音に係る環境基準. 平成 24 年 3 月 30 日環境省告示第 54 号, 2012.
- ・ 厚生労働省. 児童福祉施設の設備及び運営に関する基準. 令和 4 年 1 月 31 日厚生労働省令第 20 号, 2022.
- ・ 小松正史. サウンドスケープのトビラー音育・音学・音創のすすめ. 昭和堂, 2013.
- ・ Lynne A. Werner and Kumiko Boike. Infants' sensitivity to broadband noise. The Journal of the Acoustical Society of America, 2001.
- ・ 文部科学省. 幼稚園設置基準. 平成 26 年 7 月 31 日文部科学省令第 23 号, 2014.
- ・ 文部科学省. “幼児理解に基づいた評価の意義”. 幼児理解に基づいた評価 (平成 31 年 3 月). チャイルド本社, 2019, p.2-27.
- ・ 文部科学省. 学校環境衛生基準. 令和 4 年 3 月 31 日告示第 60 号, 2022.
- ・ 二宮貴之. 幼児教育課程における音楽の指導法に関する研究：サウンド・エデュケーションに着目して. 国際幼児教育研究. 2018, 25, p.131-140.
- ・ 西田治. サウンド・エデュケーションの目指すものー『世界の調律』からの解説. 音楽教育実践ジャーナル. 2011, 9 (1), p.110-119.
- ・ 大石桂子. 『音さがしの本 - リトル・サウンド・エデュケーション』にみられる音の聴き方の諸相. 学校音楽教育研究. 2005, 9, p.67-68.
- ・ R.Murray Schafer. The Tuning of the World. Alfred A. Knopf, 1977.
- ・ R.Murray Schafer. サウンド・エデュケーション. 春秋社, 1992.
- ・ R.Murray Schafer, 今田匡彦. 音さがしの本 リトル・サウンド・エデュケーション 増補版. 春秋社, 2009.
- ・ R.Murray Schafer. 新装版 世界の調律. 平凡社, 2022.
- ・ 嶋田容子, 志村洋子, 小西行郎. 環境音下における幼児の選択的聴取の発達. 日本音響学会誌.

2019, 75 (3), p.112-117.

- ・志村洋子. 幼稚園・保育所における保育室内の音環境 - コミュニケーションを支える音環境. 騒音制御. 2003,27(2),p.123-127.
- ・志村洋子. 保育活動と保育室内の音環境－音声コミュニケーションを育む空間を目指して－. 日本音響学会誌. 2016, 72 (3), p.144-151.
- ・谷中優. サウンドスケープにおける理論と実践. 金沢星稜大学人間科学研究. 2009, 2 (2), p.35-40.
- ・塚本美知子編著. 子ども理解と保育実践－子どもを知る・自分を知る. 萌文書林, 2018.
- ・鳥越けい子. サウンドスケープ その思想と実践. 鹿島出版会, 1997.
- ・鳥越けい子. “サウンドスケープ”. 日本音楽教育辞典. 日本音楽教育学会編. 音楽乃友社, 2004, pp.393-397.

#### 参考文献

- ・伊藤眞理, 半澤礼之. 保育士志望の学生における「こども理解」に対する意識－期待と不安という観点から－. 北海道教育大学釧路校研究紀要. 2020, 52, p.1-8.
- ・古根川円. “音を感じる・音で遊ぶ 1 節生活や遊びの中での音遊び・リズム遊び”『表現者を育てるための保育内容「音楽表現」－音遊びから音楽表現へ－』教育情報出版, 2020, p.39-40.
- ・文部科学省. 幼児理解と評価（幼稚園教育指導資料第3集）. ぎょうせい, 2010.
- ・田中知子. 保育者養成校における領域表現にかかわる授業実践の動向－創造性を育む音・音楽にかかわる授業内容を探る－. 大阪総合保育大学紀要. 2020, 15, p.131-144.
- ・渡辺桜. 保育者に求められる子ども理解－子ども理解の様々な視点と基本的特性－. 愛知教育大学幼児教育研究. 2000, 9, p.27-32.
- ・山岸美穂, 山岸健. 音の風景とは何か サウンドスケープの社会誌. 放送出版協会, 1999.

#### 注釈

- 1) 「きく」については, 本人の意識や状況等によって「聞く」「聴く」などを使い分けた表現が用いられるが, 本研究がこども理解を目的とし, こどもは状況や意識が常に変化し続けることを踏まえると, 「聞く」「聴く」などの表現を明確に使い分けることは難しい。

そこで, 引用等を除き, 意図して平仮名表記の「きく」に統一した。

- 2) 2つあるいはそれ以上の音脈が提示されたときに, どちらか1つの音脈に注意を向けること。(G.R. ファンデンボス 2013: 527)
- 3) カクテルパーティーのときに, 多くの会話の中で1つの会話に集中することができるように, 1つの会話に注意を向ける一方で他の会話を無視することができる能力のこと。(G.R. ファンデンボス 2013: 120)
- 4) 日本では「世界サウンドスケープ・プロジェクト」とも訳され, カナダのプリテッシュ・コロンビア州のサイモン・フレーザー大学コミュニケーション学部内に本部が置かれたプロジェクト。1971年に活動を開始した。(R.Murray Schafer 2022: 569-570)